「神の国」と「地上の国」―アウグスティヌス『神の国』を中心に―

菊　地　伸　二

はじめに

『神の国』は、アウグスティヌスの晩年の大作であるとともに、『告白』『三位一体論』と並んで彼の主著の一つに数え上げられるものである。

アウグスティヌスは、この作品を、59歳から72歳までの、実に13年もかけて執筆し続けた。年代的には、413年から426年頃である。

また、この作品は、歴史哲学、宗教哲学の古典として西欧の後の思想潮流に対して多大な影響を与えたと言われるものであり、全体は22巻から成り、日本語訳が複数出版されているが、たとえば、岩波文庫の翻訳本の場合は５冊ほどの分量になる。

さて、このような思想界にも多大な影響力を有している大著から、このささやかな論稿のなかで、わたしたちはどのようなことを明らかにしようとしているのであろうか。

全巻を貫いている主題、それは非常に端的に言うならば、「神の国」と「地上の国」、この二つの国の始まり・展開・結末であると言うことができるであろう。

そしてこの論稿においても、わたしたちは、「神の国」と「地上の国」の両者の歩みを叙述するなかで、アウグスティヌスが考えていたひとつのこと、とりわけ、歴史的共同体のなかにおける「自由」の問題について検討していたことについて少しでも明らかにしたいと思っている。

執筆の順序は次の通りである。

第１章　『神の国』の執筆をめぐって
第２章　『神の国』という作品――その構成と概要
第３章　「神の国」と「地上の国」
第４章　共同性と自由

第１章　『神の国』の執筆をめぐって

アウグスティヌスは、自らのほぼすべての作品について、最晩年にそれらを振り返り、『再考録』と呼ばれているものの中で記している。この大著『神の国』についても例外ではない。

この『神の国』の執筆の原因となった出来事は、410年にローマにゲルマン民族が侵入してきて、都市が陥落したことである。この辺りの事情については、『再考録』では次のように述べられている。

> とかくするうちに、ローマはアラリック王の率いるゴート族の侵入と大きな災害の衝撃によって破壊されたが、このローマの破壊を、わたしたちがふつう異教徒とよぶ、多くの虚偽の神々の崇拝者たちは、キリスト教のせいにしようとして、いつもよりもはげしくきつく真実の神をののしりはじめた。そのためにわたしたちは、異教徒たちの瀆神や誤謬を反駁するために『神の国』の書を書こうと決心した[(1)]。（*Retractationes,* Ⅱ, 69）

その当時のイタリア（とくにローマ）はゲルマン民族の侵入によってかなりの不安定な状況にあったようであり、たとえば、そのことは『書簡』99からも窺える。

それは、ローマの惨状について記している。すなわち、408年、ローマがゲルマン民族に包囲されたとき、アウグスティヌスは、イタリアへ手紙を出し、さまざまな風説があるので、実情の詳しい報告を要請している。

飢餓と悪疫のためローマは危機に瀕し、埋葬されていない死体は悪臭を放ち、人肉を食する者もあるほど、悲惨な状態であったらしいが、アウグスティヌスは悲しい情報でも、人びとが苦しみ、泣いているのならば、共に苦しみ、泣くために正確に伝えてほしいと頼んでいる。安定したものが崩れていくことへの恐怖がみなぎっている書簡である[(2)]。

そしてローマがこのような経験をしたことに対して、これはローマが長らく信じていた神々を捨てて、キリスト教を信じはじめたからだ、という評判が広がりだした。それを受けて、アウグスティヌスの弟子であったマルケリヌスは、ぜひとも師匠にそのような根拠のない非難に対して反駁してほしいと依頼をしてきたのである。

第２章　『神の国』という作品――その構成と概要

全体で22巻から成る『神の国』は、どのような構成になっているのであろうか。

大きくは、前半部（第１～10巻）と後半部（第11～22巻）に分けることができるが、さらに前半を二つに、後半を三つに分けることにより、全体としては、次のように五つの部分に分けることができるであろう。

【第１～５巻】地上の幸福のために神々を礼拝する者たちについて
【第６～10巻】永遠の幸福のために神々を礼拝する者たちについて
【第11～14巻】二つの国、一つは神の国、もう一つは地上の国、その始まりについて
【第15～18巻】二つの国の展開してきた道筋
【第19～22巻】二つの国の最終的な到着点

そのうち、前半部の第１～10巻は、キリスト教とは異なる宗教や哲学についての見解とその問題点を扱っており、後半部の第11～22巻は、アウグスティヌスが主張する「神の国」と「地上の国」についての見解が述べられている。前半部で、キリスト教以外のさまざまな宗教や哲学を批判しつつ、後半部において、本格的に自分自身の考えを展開していく、という構成になっていると言ってよいであろう。

ところで、アウグスティヌスは、執筆を進める際に、ときどき、それまで述べたことを整理しつつ、また、その次に扱うことを予告しながら、論を進めていくという手法をとる。

それは『神の国』が公けにされていった経緯と関係していると思われるが、たとえば、第10巻の最後では、次のように述べられている。

> この十の巻のうち、はじめの五巻は、この世の生に属する善きもののゆえに神々を拝すべきであると思いなす者たちを反駁して書かれた。あとの五巻は死ののちおこるであろう生のために神々の礼拝が保持されるべきであると信じる者たちを反駁して書かれた。
> したがってこれに続いて、わたしは先に第１巻で約束したように、二つの国、それらはわたしが述べたとおり、この世にあっては互いに錯綜し入り混じっているのであるが、その発端、進展、そして定められた結末について、神の助けが得られるかぎりで解き明かそうとおもう。（X, 32）

ここには、先に述べられた、前半部の概要と、後半部で扱うことの予告がなされている。

さらに、第18巻の冒頭では、17巻までに論じられた主題について整理されている。すなわち、最初の十巻では、神の国の創設者であるキリストよりも自分たちの神々を選び、この上もなく有害な嫉妬をもってキリスト教徒をはげしく憎むところの神の国の敵を反駁している。

つづく第11～14巻では、両方の国の起源について扱われる。第15巻では、最初の人間からノアの洪水、アブラハムまでが扱われる。第16巻では、アブラハムからイスラエル人の王たちが扱われる。第17巻では、受肉された救い主の到来までが扱われる。第18巻では、アブラハムの時代からもう一つの国がどのように進んだのか、ということが扱われる予定である。（XVIII, 1参照）

このように、アウグスティヌスは、それまで述べたことを整理しながら、これから述べることを予告しつつ、執筆を進めていくのである。

前半部のところは、たしかに、キリスト教を非難する異教徒に対して、その根拠がないことを記している。たとえば、第３巻では次のように言われている。

> 神々が崇拝されていた時代にも、あのような多くの災厄がおこったのに、神々の崇拝が禁じられたものが、現在の苦難をキリストに帰するのは、何と恥知らずなことであろうか。（III, 31）

ここでは、アウグスティヌスの眼差しは、アラリックのローマへの侵入をキリスト教のせいにしようとする異教徒に対して、キリスト教に先立つ神々の時代からも、多くの災厄がローマ帝国に起こっていたことを指摘するのである。

また、ローマのみならずすべての諸国の支配は、偶然や星の位置によるのではないか、という見解がなされるが（第5巻参照）、それに対して、アウグスティヌスは、すべてを統御する神、その神の摂理を主張するのである。

たとえば、第4巻では、この世の王と王国の支配の期間については、真の神の判断と権能とによって定められている（IV, 33）と言われ、第5巻では、その律法によって万物が制約される神の普遍的摂理（V, 11）について述べられるのである。

後半部（第11～22巻）では、二つの国の始まり・展開・結末が扱われるので、当然のことながら「聖書」に記されていることが大きなウエイトを占めるようになる。

とくに、旧約聖書のうちに、「神の国」の象徴や、その預言を読み取ることが盛んに行われる。

たとえば、ノアのところでは、「ノアの箱舟は、この世にあって旅を続ける神の国の象徴である」（XV, 26）と言われる。

また、アブラハムのところでは、「アブラハムの時代から、神の国の知はいっそう明瞭になる」（XVI, 12）と言われる。

わたしたちは、「アブラハムの犠牲」（XVI, 24）のうちに、神の国の歴史を象徴的に読み取ることが可能であり、また、「アブラハムに現れた三人の天使」（XVI, 29）、「ヤコブの夢」（XVI, 38）、「ヤコブがユダに対してなした約束」（XVI, 41）、「カナンの地についての神の約束」（XVII, 2）、「サムエルの母ハンナの預言」（XVII, 4）、「エリに語られた預言」（XVII, 5）、「ダビデに対して与えられた息子についての神の約束」（XVII, 8）等のうちにもそれが可能なのである。

さらに、「詩編」のうちに、主なるイエス・キリストおよびその教会についてダビデがどのように預言しているか（XVII, 15）を探ることが可能なのである。

第18巻では、たしかに、アブラハム以降の、「地上の国」の動向を跡づけることに力点が置かれるものの、と同時に、旧約聖書のいわゆる預言書のなかに含まれる、キリストに関する預言についての考察も行われている。

たとえば、ホセア、アモス（28）、イザヤ（29）、ミカ、ヨナ、ヨエル（30）、オバテヤ、ナホム、ハバクク（31, 32）、エレミヤ、ゼパニヤ（33）、ダニエル、エゼキエル（34）、ハガイ、ゼカリヤ、マラキ（35）のごとくである。

こうして、アウグスティヌスは、後半部において、二つの国の始まり・展開・結末について論じるのであるが、次章では、その二つの国と言われる「神の国」と「地上の国」について考察することにしたい。

第3章　「神の国」と「地上の国」

「神の国」と「地上の国」について、アウグスティヌスは果たしてどのように考えていたのであろうか。このことは、彼が、この歴史的世界をどのように考えていたか、ということと深く関係する問いである。

アウグスティヌスは、若いときに、マニ教の影響を強く受けていたことがあった。その教説は、善悪二元的なものであり、光の国と闇の国という二つの国が措定されていた。「神の国」と「地上の国」はそれと同じように考えるべきなのであろうか。そもそも「神の国」と「地上の国」とは、明確に捉えられるものなのであろうか。

(1)「神の国」と「地上の国」の混合

アウグスティヌスは、二つの国について、端的に次のように語っている。

> じっさい、最後の裁きによって分けられるまでは、二つの国は錯綜しあい、たがいに混じり合っている。（I, 35）

この世界には始まりと共に終わりがある。そしてそのなかにあって「神の国」と「地上の国」はあるのであるが、その両者は、むしろ、互いに混ざり合いながら存在しているのである。

別の箇所でも同様の表現は見出される。

> 二つの国、すなわち、地上の国と天の国との――両者は先に言ったとおり、この束の間の世では、いわば、からみ合い、たがいに混じ

り合っている――起源と発展と定められた終末とについて……（XI, 1）

このように、アウグスティヌスにおいては、「神の国」と「地上の国」という構図はかなり明確なものではあるが、そのもとに何を示しているかは必ずしもわかりやすいものではない。そもそも、国というからにはそこに住む住人のような存在を想定せざるを得ないが、果たして、それは誰であるのか。

そこで次に、『神の国』の叙述にたびたび登場してくる「善き人」と「悪しき人」という表現に注目してみよう。

(2)「善き人」と「悪しき人」の苦しみ

二つの国がこの世界においてどのような形で存在するにせよ、この世界に存在している人びとは、それぞれの人生を送る中でさまざまな経験をし、なかでも苦しみや苦悩の体験をする。しかし、その体験をどのように受けとめるか、それは人によって異なっている。すなわち、アウグスティヌスは次のように述べる。

同じ苦悩を受けながらも、悪しき人は神を呪い、そのみ名を汚すが、善き人は神に祈り、そのみ名をほめたたえる。(I, 8)

この苦悩をどのように受けとめるかで、「悪しき人」と「善き人」とは区別される。とはいえ、「悪しき人」と「善き人」とは、黒と白のごとく、お互いを相容れないというような形で区別されているわけではないことは次の文からも明らかである。

かれらがいっしょに懲らしめられるのは、かれらがいっしょに悪しき生活を送るからではなく、いっしょにこの世において生活を、同じようにではないが、しかしいっしょに愛するからである。……さらに、善き人びとは、ちょうどヨブのように、この世の悪しきものによって苦しめられる別の理由をもっている。すなわち、それは、信仰のどれほどの力によって報いを求めることなく神を愛しているか、人間の心が試され、知られるようになるためである。(I, 9)

「悪しき人」と「善き人」は、「地上の国」と「神の国」のそれぞれの属する人びとと関連づけて考えざるを得ない。

では、「神の国」を構成する者とはどのような存在であろうか。

(3)「神の国」を構成する者たち

アウグスティヌスによれば、「神の国」を構成する者としては、天使の存在と善き人を念頭においている。

もっとも彼は、天使と人間との間には存在的にも差異があることを知らないわけではない。しかし、それにもかかわらず、両者は、同じ一つの国に属することが可能である、と見ている。

わたしたちは、その意志が天使に似ず、病弱で脆弱であることによって不幸であるだけ、天使からその生命の価値においてかけ離れているのである。じっさい、わたしたちは、肉の状態において地上に住むからでなく、不浄な心をもって地上のものを思うから、かれらに結び付けられないのである。しかし、心の汚れを癒されて、……信仰によってかれらに近づくのである。(VIII, 25)

ここで扱われている天使とは、とくに、悪霊として知られる堕天使のことではなく、神のもとにいる聖なる天使のことである。単に、存在的にだけでなく、その在り方においても、人間は較べるものを持たないのであるが、しかし、人間が心の汚れを癒されれば、その信仰によって近づき、一つの国のなかで生きることが可能だと考えるのである。

神々という名は、誤って異教の神々にあてがわれているが、聖書の権威によってそれは聖なる天使と義しき人とにあてがわれる。(IX, 23)

ここでは、「善き人」の代わりに「義しき人」という言葉が使われており、聖なる天使と義しき人が、ともに神々という名で呼ばれている。

「神の国」を構成する者として、聖なる天使と善き人（義しき人）があげられる、ということについては、特段、問題はないと思われるかもしれない。

しかし『神の国』を執筆した当時においては、自然本性において人間よりまさる天使と人間が共なる立場にある、ということはけっして自明なことではなかった。じっさい、人間より自然本性的

にまさるダエモンへの崇拝が異教の間では行われていたが、それをアウグスティヌスは批判する。すなわち、次のように言われている。

> 理性的本性をもつものにあっては、意志と愛のいわば重みは非常に大きい。自然的本性の秩序によると、天使たちが人間にまさるものであるのに、善き人の方が悪しき天使にまさる。（XI, 16）

自然本性の秩序をこえた意志と愛の秩序が、ダエモンと善き人との立場を逆転させている。しかし、聖なる天使のように、自然本性的にも人間に優っているばかりでなく、その意志と愛においても優れている天使については、なにゆえ、善き人と共にある、と言えるのであろうか。むしろ、人間は、天使的存在こそ崇める必要があるのではないだろうか。

実は、天使的存在が崇拝されるべきか、という問題こそは、ある意味で、前半部の第6 ～ 10巻における異教に対する批判の要となっていると言ってよいであろう。すなわちそこでは、「自分自身に犠牲がささげられることを欲するのか、それともひとり神に犠牲がささげられることを欲するのか」（X, 1）ということが問題となっており、それがまた、聖な天使とダエモンとの違いであるとも言えるのである。

アウグスティヌスがプラトン哲学を非常に高く評価しながらも、誤っているとしたのはその点であると指摘する。（X, 3）

このように異教の哲学を批判する中で、「真の犠牲、それは聖なる共同体において神に固くよりすがるためになされるすべての業」（X, 6）であることが確認されるのである。

こうして、「神の国」については、次のように言われることになる。

> わたしたちは、かれら（天使）とともに、「詩編」に「神の都よ、あなたについて光栄あることが語られた」といわれている一つの神の国にあるからなのである。この一つの国のわたしたちから成る部分は巡礼の旅の途上にあり、かれらから成る部分はわたしたちを助けている。（X, 7）

また、「神の国」を構成する者たちは、ひたすら神によりすがることによって生きるのである。すなわち、次の通りである。

> 聖なる国は、神のうちに存在することによってその存在の仕方を受け、神を観想することによって光を受け、神によりすがることによって喜びを与えられる。（XI, 24）

また、次のようにも言われる。

> この善きことを共通してもっているところの者たちは、かれらが固くよりすがっているあの方と共に、かつ、かれら自身のうちに、聖なる共同体を形成しているのであって、かれら自身が一つの神の国であり、同時に、かれら自身が神の生けるささげものであるとともに生ける宮となるのである。（XII, 9）

こうして、神によりすがりながら生きていく共同体がある一方で、自らに犠牲が向けられることを求める集団も存在しているのであり、こうして、この世界においては、二つの国が存在することになるのである。それについては、次のように言われている。

> この世の生の可死性のうちに居留するのではなく、つねに天にあって不死なる神の国について、すなわち、神によりすがって、けっして神から離れ去ったこともなく、また将来離れ去ることもない聖なる天使たちについて、それらの天使たちと、永遠の光を見捨てて闇となった天使たちとを、神は、すでに述べたように、最初に分けられたのである。（XI, 28）

これは、天使たちの二つの集団として理解することも可能であろう。すなわち、次の通りである。

> わたしたちは天使たちの二つの集団を考える。すなわち、一方は神を享受する集団であるのに対して、他方は、傲慢に増長する集団である。（XI, 33）

アウグスティヌスは、二つの天使の集団、また、二つの人間の集団を措定して、合わせて四つの国が存在するという可能性も残しつつも、それらは二つの国に収斂されるものである、と述べている。

> したがって、四つの国があるのではなく、それよりもむしろ、二つの国、ないしは社会――その一つは、ただ天使だけでなく、なお人間の、善き者から成り、他の一つは悪しき者から成る――があるといって正当である。（XII, 1）

こうして「神の国」を構成する者たちとそれに相反する者たちの二つの集団があることになる。

(4)「神の国」と「地上の国」

以上の記述より、この世界において「神の国」と「地上の国」の二つがあることが述べられることになる。この両者の対比は、アウグスティヌスにおいてさまざまな言葉で表現される。たとえば、次のように言われる。

> その一つは、肉にしたがって生きる人間から成る国であり、いま一つは、霊にしたがって生きる人間から成る国である。
> それらいずれの国の人間は、それぞれの種類にかなった平和において生きることを望んでおり、そしてその求めるところに到達したときには、それぞれの種類にかなった平和において生きることになるのである。(XIV, 1)

肉にしたがって生きる人間と霊にしたがって生きる人間、この表現は、別のところでは、人間にしたがって生きることと神にしたがって生きることとも言われる（XIV, 4; XV, 1)。

あるいは、愛との関係で説明しようとしている箇所もある。

すなわち次の通りである。

> このようにして、二種の愛が二つの国をつくったのであった。すなわち、この世の国をつくったのは神を侮るまでになった自己愛であり、天の国をつくったのは自己を侮るまでになった神の愛である。一言で言えば、前者は自己自身において誇り、後者は主において誇るのである……前者の諸民族においては、この君主たちや、君主たちが隷属させている人びとのうちに、支配しようという欲情が優勢であるが、後者においては、上に立つ者は思慮深い配慮のように、そして服従する者は従順に従うことにより、愛において互いに仕えるのである。(XIV, 28)

また、とくに、地上の国の在り方を説明するものとして、次のような説明もされている。

> かれらはまっすぐな心を持つ代わりに転倒した心をもって生きながら、それにもかかわらず神に贈り物を提供するのであって、それによってかれらは神を買収して、自分たちのよこしまな欲望を治療することによってではなく、充たすことによって助けてもらえるのであると思っている。これが地上の国の特質である。すなわち、神や神々を礼拝するのであっても、人びとのために配慮せんとする愛からではなく、支配力を振るおうとする欲望からそうするのであって、神や神々の援助を得て、勝利のこの世的な平和とのうちに統治するためである。(XV, 7)

以上のように、両者の対比はさまざまな言葉によってなされるが、こうして二つの国は、この世界にありながらも、この世界だけに執着しない在り方と執着する在り方を示すものとして次のようにも言われる。

> わたしたちが論じている二つの国、すなわち、ひとつはこの世にあっては巡礼の旅を続けている天の国であり、他はこの世の喜びを渇望して、あたかもそれが唯一の喜びであるかのように、それに固執している地上の国を象徴的に示している。(XV, 15)

(5) 神の国の民

前節の最後の引用のところで、神の国は、この世界では巡礼の旅を続ける、と言われている。アウグスティヌスが非常に好んだ表現であり、幾度も用いられているのであるが、ただ、そのような生き方をする神の国の民も、やはり、この世界では担っていることがあるのである。

> 神の国の民も、この地上の巡礼の旅を続けている間は、上なる故国の平安を慕いあえぎながら、罪の結果としての弱さを負いながらも癒されていくのである。(XV, 6)

アウグスティヌスにおいて、教会共同体もまた神の国の在り方をもっとも如実に示すべきものとして考えられているが、このような教会的な在り方は、彼の見解によれば、キリスト以後に始まったものではないとされる。すなわち、次のように言われている。

> このように教会は、この世にあって、この悪しき時代にあって巡礼の旅を続けている。その旅は、キリストが肉において現存された時代および使徒たちの時代から始まっただけでなく、不信心な兄弟によって殺された最初の

善なる人、アベルからはじまって、この世の終わりに至るまで、世の迫害と神の慰めのあいだに続いていく。(XVIII, 51)

すでに述べられたように、神の国と地上の国はこの世界においては混ざり合っており、二つに明確に分けられるものではない。それが明確に分かれるのは、最後の裁きのときである。ただ、両者は、さまざまなものを共有しながら、しかし、それぞれに異なった価値観を持ちながら、それぞれの結末に向かうのである。

しかしながら、これらの二つの国は、最後の裁きによって分けられるまで、異なった信仰、異なった希望、異なった愛をもって、同じようにこの世的な悪に苦しむのである。そしてそれぞれが決して終わることのない終わりを受け取るのである。(XVIII, 54)

また、次のようにも言われている。

二つの国が混在しているあいだは、わたしたちもバビロンの平和を用いるから、神の民は、信仰によってバビロンから自由にされているけれども、しばらくのあいだ、バビロンのもとで遍歴の旅を続ける。(XIX, 26)

さらに、次のようにも言われている。

天上の国と地上の国の両方の人間、これら両方の家にとって、可死的なこの世の生に欠くことのできない事物の使用に関しては共通するのであるが、それぞれの、それを用いる目的は全く異なった固有なものである。(XIX, 17)

このように神の国の民は、この世界に生きる限り、たとえその目指すところは違うけれども、地上の国の民と、多くのことがらを共有する。しかし同時に、彼らの身体的な欲求、感情、あるいは理性による統御については、地上の国の民と大きく異なることも指摘されている。

たとえば、「聖なる者たちの肉」(XIII, 20;22) については、「肉が霊に仕えているとき、その肉を霊的とよぶことは正当である」と言われている。

また、「聖なる者たちの感情」(XIV, 4) については、「聖なる神の国の民は、神にしたがってこの世の旅を生きるのであって、かれらは、聖なる書と健全な教えに基づいて、恐れ、求め、悲しみ、そして内的に喜ぶのである。かれらの愛が正しいものであるがゆえに、感情の動きはすべてかれらにあっては正しいのである」とも言われている。

さらに、「聖なる者たちの愛」(XIX, 14) については、次のように言われている。

神を愛する者は自己自身を愛することにおいて誤らない。そこから人間は、自己自身のように愛するように命ぜられているその隣人が神を愛するように心を用いるということになる。

ここには、神への愛と隣人への愛との相互の興味深い関係が記されているのである。

このようにして、「神の国の民は、この現実の生にあっても、希望によって幸福である」(XIX, 20) とも言われるのである。

それでは神の国の民が、その中で生きている秩序とはどのようなものなのであろうか。それについては次のように言われている。

唯一にして最高であられる神が、ご自身のほか他の何ものにも犠牲をささげることがないよう、ご自身の恩恵によって従順な国に命じられ、その国に属し、その神に従順に従うすべての人間にあって、魂が身体に命令し、理性が服従の規則正しい秩序によって悪徳を確固として支配すること、ひとりの正しい人間が愛によって働く信仰に基づいて生きるように、正しい者たちの集団や人民は愛によって働く信仰に基づいて生きる。(XIX, 23;27)

神の国の民においてはこのような秩序が築かれているのであるが、このように、この世界において生きぬいた人びとを待ち構えているのは「平和」である。しかし、この世界で通俗的に言われるそれとはもちろん区別されなくてはならない。

徳が真実の徳であるのは次のときである。すなわち、それが善用するところのすべての善、および善きものと悪しきものとを善用することによって成し遂げられるすべてのもの、そしてかの結末―そこにおいては、わたしたちの平和が完全で大いなるものとなって、それ以上に善くなったり大きくなったりすることはありえない―にかかわるときである。(XIX, 10　下線は筆者による)

神の国の民の結末には、このように最高で完全な平和が待ち受けているのである。「平和」につ

いて、より端的には次のようにも言われている。

神の国の最高善は、永遠で完全な平和である。（XIX, 20）

第４章　共同性と自由

前章では、「神の国」と「地上の国」という『神の国』全体を貫いている主題について、いくつかの方向から考察を行った。この著作の何よりもの特徴は、もちろん、一人ひとりの人間の考察を含んではいるものの、一つの共同体を形成していく人間の考察に重きが置かれているということにある。

たとえば、最初の人間の創造については、次のように言われている。

神はこのような本性の人間を、一人の単独なものとして創造された。共同の生の一体性と和合の一致の絆とをいっそうつよくかれに意識せんがためである。（XII, 22　下線は筆者による）

あるいは、次のような言及もなされている。

神はこの祖先を単独なものとしてつくることを欲しられて、そこから多数の人間が増やされるのであるが、この事実は、多数においても協和し、一体性を保持するように促しているということ……女が男の脇腹から造られたという事実も、夫と妻の結びつきがいかに大切なものでなければならぬ。（XII, 28　下線は筆者による）

さらに、次のような言及もなされている。

神はただ一人の人間からすべての人間が出ることを意図なさったのであるが、それは人類がたんに自然本性の類同性によって結びつくだけでなく、平和の絆によってともに結ばれて、一種の血縁的な親近の関係をもつことによって和合の一致へ至るためでもあった。（XIV, 1　下線は筆者による）

これらの三つの引用に共通していることは、神はアダムをたしかに単独な者として造ったのではあるが、そこから多数の人間が誕生することによって、お互いが平和、和合の絆で結ばれていくことによって一体性が築かれていくことが意図されていた、ということである。

第15巻には次のような言葉も見出される。

善性というものは、かれらの間に一致があればあるだけ協同者を分かつことのない愛によって、いよいよ広大なものになるような所有なのである。（XV, 5）

ところで、アダムの創造において、その将来的な方向性としては人間の共同性が重視されていたということが確かに言われはしたのであるが、このアダムによって、人間の共同体が担わなくてはならなかったことがらについては無視することはできないであろう。

それがいわゆる「死という罰」（XIII, 13;14）という問題なのである。それはわたしたち人類が、いわば「最初の罪によって罰をこうむったこと」であり、また、わたしたちが「死を引きずっているということ」でもある。

当然のことではあるが、意志の自由においても変化が起こった（XIV, 11;12）。わたしたち人間は、「自己自身に逆らう自己自身の不従順」（XIV, 15）という事態を惹起することになり、また、「身体に対する自由を失う」（XIV, 23）ことにもなる。

また、「善人はたとえ僕であっても自由であるが、悪人はたとえ支配者であっても僕である……なおいっそう重要なことではあるが、多くの悪徳を持てば持つほど多くの支配者の僕なのである」（IV, 3）という言葉に見られるように、わたしたちは、悪徳を持てば持つほど、本来有していた自由性を失っていくことになる。

ただ、そのような不自由な状態にただ受動的に従うというのではなく、そのような状態からいわば解放されることも起こることなのである。

しかしながら、地上の国の民は、罪によって破壊を蒙った自然本性において生まれるのに対して、神の国の民は、自然本性を罪から解き放つ恩恵によって生まれるのである。（XV, 2）

そのような状態から解き放つ力、それは神の恩恵と呼ばれている。そのような力によって、人間は、たしかに一人の祖先アダムによって、罰を受けた状態に追いやられたものの、多くの者から一つのものを生み出すような力へと導かれていくことが可能となるのである。

それは次のような言葉で語られている。

したがって、約束を通して生まれた人、イサクは、恩恵の子すなわち自由の国の民、永遠の平和に与る者を象徴しているのである。そこには何らかの意味で利己的で私的な意志の愛は存在せず、同じ一つの共同の不可変の善を喜び、多くの者から一つの心を生ずる――それは愛の完全で一致した従順である――愛が生ずるのである（XV, 3）

わたしたちは、この世界の現実というものを重層的に捉えることができるのである。一つは紛れもなくその生きている現実そのものであるが、もう一つはその現実そのものが別の何かを示すものとして理解することが可能であり、とくに、神の国を予表するような現実にこそ傾注する必要があるのである。

わたしたちはこの世の国に二つの性格を見い出すのであって、その一つは、そのものの現実の存在を示すのであり、ほかの一つは、そのものが現実に存在することによって神の国が象徴的に暗示されるためである（XV, 2）

『神の国』の最終巻の最終章には、「最初の意志の自由と最後の意志の自由」（XXII, 30）について述べられている。

かれらが罪のうちにあってよろこぶことができないという事実はかれらが自由意志をもたないということではない。むしろ、意志は、罪を犯すよろこびから解放されて罪を犯さないことのよろこびへと固定されたときのほうが、いっそう自由である。じっさい、人間が最初に正しく造られたときに与えられていた最初の意志の自由は、罪を犯さないことのできる能力であったが、しかし罪を犯すこともできた。しかし、この最後の自由は、罪を犯すことができないということによってより力あるものである。

同箇所において次のようにも述べられる。

最初にひとが罪を犯さないことのできる自由意志が与えられ、そして最後に罪を犯すことのできない自由意志が与えられる。また、最初のものは功績を得るためであり、最後のものは報いを受け取るため。しかし、人間の自然本性は罪を犯すことができたために罪を犯したのであるがゆえに、罪を犯すことのできない自由へと至るためには、いっそう大きな恵みによって自由とされなければならない。

以上述べられたことより、『神の国』における「自由」の問題は、とくに人間が共同体、社会を形成していくことと関係づけて論じられていることがわかる。

ここでは、単独者としての人間ではなく、ひとつの共同体を築こうとする人間のなかに現れる「自由」が問題となる。

それは、各々の人間が喜びのなかで神に従いながらも、お互いが、そこに全体としての一致を築こうとする、他者のために従おうとする愛の営みにうちに見出されるような「自由」と言うことができるのではないだろうか。

註

(1) 日本語の訳としては、原則的に、岩波文庫『神の国』(一)～(五)(服部英次郎・藤本雄三訳(ただし、藤本氏は（四）（五）のみ)、1982年～1991年）を使用した。なお、ラテン語のテキストとしては、Bibliothèque Augustinienne（羅仏対訳）シリーズの33～37巻（*La Cité de Dieu*）を使用した。

(2) なお、この叙述については、宮谷宣史『人類の知的遺産15　アウグスティヌス』（講談社、1981年）p.221 ～ p .222を参考にした。

Augustine on City of God and city of this world in *De Civitate Dei*

Kikuchi, Shinji*

アウグスティヌスの最晩年の大作であり、彼の主著である『神の国』を取り上げ、そのなかで､「神の国」と「地上の国」の二つの国が意味するところ､その始まり､展開､結末を考察する。
なかでも､『神の国』においては、人間の自由の問題が、単に、個人の自由ということだけでなく、人間の共同性との関連で取り上げられていることに特徴があり、アダムの最初の自由、現在の私たちの自由、終末における人間の自由の違いとその意義について共同性との関連で考察する。

キーワード：共同性，自由，自由意志

**Nagoya Ryujo Junior College*